

森のライフスタイル研究所～

市民とともに日本の森林を元気にする

—岩崎唱



2014年 長野県佐久市大沢の森の植林活動

NPO法人 森のライフスタイル研究所は、市民や企業と力を合わせ、多彩な森づくり活動を行っています。



のライフスタイル研究所(NPO The Lifestyle Research Institute of Forest)は、2003年5月に設立したNPO(Non-Profit Organization)法人です。日本の森を守り、育てていくために、都会に住む若者たちの力を借りて森づくり活動を展開しています。

日本は、国土の約7割近くが森林に覆われた緑豊かな国です。豊かな森林があるおかげで水資源に恵まれ、国土には多くの川があります。養分に富んだ川の水は海へと注ぎ、豊かな海の幸を人々に与えてくれます。

また、日本人は古来より木を活用した生活文化を大切にしてきました。森から木を伐り出し、家を作って、家具や様々な道具を作りました。薪や炭を作って燃料にしました。枯葉も堆肥として農作業に活かされてきました。日本の森は、私たちの暮らしを支えてくれる大切な自然の財産だったのです。しかし、近年になって都市では、人々は近代的な鉄筋コンクリートの建物に住むようになり、薪や炭の代わりに石油や電気エネルギーが使われるようになりました。資源が活用されなくなった森林は、人の手が入らなくなり荒廃していきました。日本の多くの森が間伐などの森林整備の遅れにより、健全とはいえない状態にあります。それは、手入れをしない庭に雑草が生い茂り、荒れ果てていくのに似ています。

私たちが森のライフスタイル研究所を設立した目的は、荒廃している日本の森林状況を改善し、未来の子どもたちに美しく恵み豊かな森を残していきたいと考えたからです。しかし、私たちはプロの林業家ではありません。私たちにできることは何かと考え、私たちの生活の中でもっと木を使うことが森林整備の役に立つと考えました。そこで、設立してからの5年間は、主に木質ペレット燃料による間伐材の有効利用の提案を行ってきました。具体的には長野県の2つの木質ペレット燃料工場の操業と1,000台を超えるペレットストーブ・ボイラーの普及に携わってきました。

そして、2008年に「楽しさを森づくりのエンジンに！」という森づくりビジョンを策定しました。木質ペレット燃料の普及活動を通じて、都会に住む多くの人が森と接する機会がなく、森や木に対する関心が薄いことを痛感しました。都会の若者たちが森と接する機会を増やし、森を好きになり、関心を持ってもらうことが必要だと考えたのです。



2015年 長野県佐久市大沢 薪の森の下草刈り

2009年から、長野県佐久市の森を活動フィールドに都会に住む若者たちの手による森づくり活動をスタートさせ、インターネットなどで参加を呼びかけ、活動フィールドがある自治体や住民と連携し植林から、植林準備のための地拵え、植えた木を健全に育てるための下草刈りなどの森林整備活動を実施し現在も続けています。テレビやラジオにも活動の様子が紹介され、森づくりへの参加者は年を追うごとに増加しています。



2015年 長野県下高井郡木島平村 カヤの平高原牧場のブナ植樹活動

森のライフスタイル研究所では、長野県と千葉県で6つの森づくりのプロジェクトが進行しています。いずれも放置され荒廃した森や山火事に遭った森の再生、廃業したスキー場のグレンデを元の森へ還す活動、津波被害に遭った海岸林を再生させる活動など、森づくりの社会的な意義が一般の人にもわかりやすいフィールドです。

2011年からは東日本大震災の津波被害に遭った千葉県の九十九里浜の海岸林の再生プロジェクトは、インターネット等で募集した一般のボランティアに加え、多くの企業ボランティアの方々が参加してくれています。

自然環境の保全と震災復興という2つの側面を持つこの活動には、在日インド人のボランティアの方も数多く参加し、海岸林の復活のために力を尽くしてくれています。活動に参加してくれたインドの友人たちにこの場をお借りして感謝の意を表します。



2013年 千葉県山武市蓮沼の九十九里海岸津波被害林の復興活動



2013年 長野県佐久市大沢の森の植林活動

現在、森のライフスタイル研究所の活動には、「木をまなぶ」、「木にふれる」、「木をつかう」という3つの軸があります。3つの「木」という漢字を合わせると「森」という漢字になります。

「木をまなぶ」活動では、東京都内で学習会、セミナー、トークショーなどを開催し、森や林業に関する知識を高めることをめざしています。「木にふれる」活動では、月に1～2回程度の頻度で千葉県や長野県に森づくりのツアーを開催しています。「木をつかう」活動では、箸づくりや木の積み木づくりの活動を展開しています。木の積み木づくりは、アフターファイブや昼休みの時間を利用して企業の有志の方々に半完成品の積み木を紙やすりで磨き完成品にして、東日本大震災の被災地の幼稚園や保育園に寄贈しています。子どもたちが、この積み木で遊ぶことで、素材としての木に親しみ、創造力を伸ばすとともに森や自然に対して興味を持つきっかけになると信じています。企業の有志の方々にとつても時間を有効に活用できる楽しい社会貢献活動として喜ばれています。



2014年 毎日メディアカフェでの学習会

この他にもシングルマザーのための「母と子の野外活動」プロジェクトも2014年よりスタートさせました。シングルマザーの家庭では、子どもをアウトドアに連れて行って遊ばせることが難しいといわれています。そこで、森のライフスタイル研究所が気軽に参加できる野外体験バスツアーを企画し、森林教育を含む子どもたちに様々なアクティビティを提供しています。お母さんたちも、参加者同士で相談や情報交換をすることができます。



2014年 山梨県道志村の母と子の野外体験(釣り体験)

森のライフスタイル研究所の活動のモットーは「正しいことを、楽しく」です。正しいこと、すなわち木を植え、育て、日本の森を守っていくことです。しかし、正しいことだけでは、長続きがしないのが人間です。森づくりは、50年、100年と続く息の長い仕事。森づくり活動を長く続けていくためには楽しいことも必要だと私たちは考えています。体力をつかう森づくりの後には、みんなでBBQをしたり、近隣の果樹園でリンゴ狩りや葡萄狩りをしたり、ワイナリーや日本酒の酒蔵を見学したり、わずかな額ですが私たちが訪れることで地域経済が少しでも活性化すればと考えています。

森のライフスタイル研究所は、これからも「正しいことを、楽しく」をモットーに森づくり活動を続けていきます。この記事を読まれて興味を持たれた方は、ぜひ一度、私たちの活動に参加してみてください。参加者の募集は下記のホームページ(日本語のみ)で行っています。

<http://www.slow.gr.jp/>

(A brief English translation of this article has been provided on page# 44.)

リジュのテレーズ

－ 三橋裕子

昨年、私の大好きな友人が描いた「マザー・テレサ」の絵をいただきました。彼女はインドの方で、ご家族と日本に住み、日本画教室に通われています。年2回お教室の方々と展覧会に出展されており、色使いがとても素敵です。

私は彼女に会うまで、絵を見に行くことがありませんでした。彼女に会うのが嬉しいのと、私は日本人なのに日本画を知らないことに刺激をうけました。日本画は見るほどに素敵で、いろんな手法があり面白いです。

生活習慣も違う日本の生活に慣れるまでは本当に大変だったと思うのですが、彼女の柔らかい笑顔と優しい雰囲気に惹かれます。私にとって、彼女は見習いたい女性の一人です。

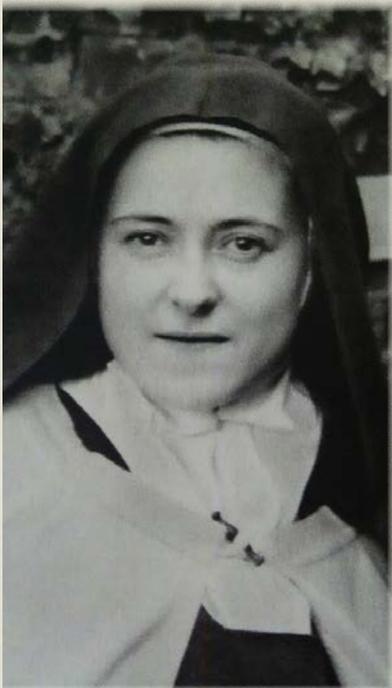
彼女の描いたテレサは、インドのコルカタで貧しい人々のための活動を生涯されてきた方です。ノーベル平和賞をはじめ、数々の賞を受けられたカトリックの修道女で、1997年に生涯を終えました。2003年には当時の教皇より列福されています。

その「テレサ」という修道名の由来ですが、アピラのテレサではなく、リジュのテレーズからだと言うほど、テレーズを愛されていたと紹介されています。

マザーテレサの絵を部屋に飾り、半年ほどたったある日、私は仕事や家庭内のストレスを別の尊敬している女性にメールで訴え、女性からの返信がリジュのテレーズの事でした。

ほどなくして、そのかたがテレーズの本を譲ってくださいました。丁寧に梱包された本が届き、何度も読み返した跡が見受けられ、手元に置いて大事にされていた本だと実感しました。

リジュのテレーズはどんな方かという、今から100年以上前の1873年にフランスで生まれ、1897年24歳という若さで肺結核により亡くられています。テレーズが4歳の時に母親を病気でなくし、母代りだった姉も9歳の時に修道院に入ります。母に次いで第二の母だった姉を失うという体験は、幼いテレーズに大きな影響を与えました。自身も修道院に行こうと決意するも、当時は若すぎて入会を断られ、15歳でようやく許可がおりました。



たちが彼女のために美しい冠を調べて、彼女の頭に載せようとしている姿を想像します。「神は私に何かの意味があってこの苦しみをとお与えになっている」と信じ、それをマリア様に捧げる花束にして、捧げる喜びに変えました。テレーズは言い訳をせずに自分だけで苦しんで平静を装い、黙って受け止めます。痛みで苦しい時や辛い時ほど微笑みをたやしませんでした。

修道院生活の日常を、時には耐え難い人間関係を、いろんな思考を凝らして耐えて、不条理な人々によって与えられる、その苦しみに対しては、天は意味を与えて下さると信じて、日々を過ごす

彼女の「小さき道」という表現は、深い霊性、精神性をわかりやすく表しています。

当時の修道院は男性の医師の診察を、カーテン越しで受けるため、症状が最初に正しく伝わっていなかったこと、何よりも不調を



修道名は「幼きイエスのテレーズ」彼女の4人の姉たちは長命であったため、妹がカトリックの聖人に上げられていくのを見守るとともに、列聖を積極的に支援する活動をされました。

死後自叙伝が出版されたことでテレーズの名がフランスのみならず、世界に知れ渡り、親しみやすい思想に人気が高まりました。通常死後50年たたないと列聖はできないという条件があるようですが、テレーズに関しては特別に緩和され、1925年、死後28年で列聖されています。カトリック教会の聖人は現在33人おられて、女性としてはアピラのテレサ、シエナのカタリナに続いて3人目です。

列聖は異例の早さのように思えますが、それ以上に驚いたのが1997年にローマ教皇が教会博士の称号を与えたことでした。

「教会博士」とはヴァチカンの聖人の中でも特に学識にすぐれ、信仰理解において偉大な業績を残した人におくられる称号とのことで、テレーズに教会博士の称号を与えるにあたっては、当時のヴァチカンでは厳格主義を唱える方が多く、彼女の単純にみえる信仰心は議論の対象でした。テレーズは修道院生活の中で、神への愛をどうやって表せばよいかと自問し、幼子のように「小さき道」を行くのだと、それは、神への愛の表現として小さな愛を心がけるということ。小さな犠牲を微笑みをもって耐え忍ぶこと。幼児が両親の愛を疑うことを知らぬように、神を全面的に信頼することだと。

神は厳しい裁きを行う存在ではなく、子を慈しむ親のような愛情深い方であると語っています。

「人間は誰も弱く、小さな存在であり、そうした人間には苦行も犠牲もいらぬ。ただ幼子のように神への信頼に徹すればよい。そうすれば神の憐れみの御心は、どんな罪深い人間にも注がれる」とのべています。

彼女は大きなことをなすのではなく、「日常の小さなことを、愛を込めて行う」ということを大切にしました。テレーズが受けた誤解や意地悪など、つらい経験には事欠きませんでした。あるときテレーズは人から説明のつかない苦しみを受けるに当たり、天国で天使

認識していながらもテレーズは日々の務めを誰よりも熱心に続けていたこと、テレーズの具合が悪いと周りの者が気づいて、修院長のマザーもテレーズが怠けているのではなく、様子がおかしいと認識しても医師の手配をしなかったこと、さらにその後一か月ほど放置だったこと。

私たちの環境であれば、不調を感じたら診察を受けるし、仕事は休みます。22歳で最初の咯血をし、24歳で亡くなるのですが、病状が進みひどい痛みの中でも穏やかに受け止めて、周りへの気遣いを忘れません。神におまかせすることはどういうことか…彼女の自叙伝が残されていたことが有難く思えます。

悪化して寝たきりのテレーズのいるところであるお墓の深さの話

1人になりたい時でも、院長の指示で側に必ず誰かがいる状況などを知るほどに、私の些細な悩み苦しみはエゴのかたまりでしかない、私にも花束にして捧げるイメージがもてるだろうかと考えました。

100年あまり前の修道院という限られた空間のなか、逃げ場も何もないところで神様にお仕えする彼女達であっても、葛藤は世俗と同じように思えます。

どこにいても、何をしても、「小さき道」の実践が出来るように心がければいい、そういう方が増えればいいと思います。

「死と闇をこえて」のなかに、

「…だれかに理解されなかったり、悪くとられたり、忘れられたりしても、憂鬱な小娘になってはいけません。かえって、他のかたがたがなさるよう努力して、皆さんの裏をかいとおあげなさい。」病床のテレーズに辛い気持ちを語ってすぐってきた修道女へのメッセージです。

テレーズのことばですが、ちょっと笑ってしまいました。

平和について考えたときに、些細なことで不安定になる私には、内なる自己の安定が一番に思えます。

友人の絵「マザーテレサ」からはじまり、「リジュウのテレーズ」に辿り着きました。

テレーズのメッセージにふれ、響くものがたくさんあります。

出来れば、皆さんにも是非一読していただきたいと思いました。

ふと眺めると、部屋に飾っている「マザーテレサ」がクスッと微笑んでいるように見えました。 ■



マザーへの旅

－ 新田ゆう子

「わたしは、高德な人の母であり、また、邪悪な人の母でもあります。

あなたが嘆きの中にある時はいつでも、自分に言いなさい。

わたしには、お母さんがいると」 ～ホーリーマザーの言葉～

元旦の夜にベルルマトに着いたわたしは、3日にはガンガーの対岸にあるサーラダマトにいました。新年の参拝客で動くこともままならないドッキネッションのお参りは、そこだけかろうじて並ぶことが出来たナハバトだけにして、大通りでサイクルリキシャを拾いました。少し走ってから、値段交渉をしなかったことに気が付きました。案の定、目的のマザーのお寺に着いた時に、倍以上の値段を吹っ掛けられたのですが、リキシャマンの迫力と言葉(ベンガル語)が通じないことに負けて、言い値通りに支払ったのです。インドでは、値段交渉してから乗り物に乗るのが鉄則なのに、それを忘れた不甲斐なさで一杯の気持ちは、お寺の扉の中へ一歩足を踏み入れると、嘘のように消えていきました。今までいた外の世界とはまるで違う静寂と、その素朴な佇まいのすべてに、心の重荷が下りていくようでした。

門を入ってすぐの守衛室にいるガードマンが、ゲストルームに案内してくれましたが、ここは尼僧院、このガードマン氏以外はみな尼さんなのです。その後、白いサリーを身に着けた若い見習い尼僧が、手続きのために事務室に案内してくれました。するとそこには、この長の尼僧がいらして、ご挨拶をすることが出来ました。インド国内からの来客と面会されているところでしたが、お土産に持ってきた日本のチョコレートをお渡しすることが出来たのです。わたしをここまで案内して下さった若い尼僧は、以前に会ったことがあるような親しみのある顔をしていましたが、清潔感と内省的な雰囲気は世俗の女性にはないものと思われました。

ほどなく、緋色のサリーを着たお部屋係りの若い尼僧がやって来て、わたしが一夜を過ごす部屋に案内してくれました。そこには、小さな木製のベッドと、テーブルと椅子がひとつずつあるだけで、それだけでもう一杯の小さな部屋でした。ベッドはマットレスなどなく、薄い敷布団と古びた掛け毛布が一枚ずつあるだけ。そして、トイレとバスは隣の部屋との共同です。間もなく、鏡がどこにもないことに気が付きました。女性が修行をするには、容貌への執着は無用ということか…!? わたしにはこの古い簡素な部屋が、すぐに快適な自分の居場所を感じられました。「ラーマクリシュナの福音」の中に、『なんと美しいところだろう! …もう、ここから動きたくない!』という、初めてドッキネッションを訪れてラーマクリシュナに出逢ったMさんの言葉がありますが、まさにその言葉通りの気持ち、『ここにずっといたい!』と思いました。お部屋係りの尼僧は、それから昼食を摂る食堂にわたしを案内して下さいました。

その日は何かの奉仕活動があったのか、ボランティアの女性が大勢、すでに食堂に座っていました。わたしはゲストが座るテーブル席に案内されました。隣には、マトの支部から修行にきているYさんが座っています。遠い中国とのボーダーにある支部から来たというYさんは、笑顔ですが寡黙で、また必要最小限の食べ物しか食べませんでした。まだ白いサリーを着ているので、尼僧になる修行中なのでしょう。わたしの隣室に滞在していたので、すぐに打ち解けました。

昼食の後は部屋に帰って少し休みました。こんなに落ち着く場所に来たことは、日本を含め今までどの国でも経験したこと

がありませんでした。人は、豪華な場所や物があるからといって幸せを感じるには限らないと実感したのです。ベッドは体を横たえるだけの大きさと、古くて重たい毛布しかないのに、これ以上の何も必要はない充足感に包まれて、午睡に入りました。

午睡の後はお茶の時間、そして間もなく夕べのアラティが始まりました。尼僧の方々が歌う「Khandana Bhava」は、心をすぐに瞑想に向かわせる透明な響きがありました。何曲かのアラティソングの後、寺院の中は完全に静かになりました。シュラインの中央には、マザーの大きなお写真が飾られていて、見事な花輪がマザーの首にかかっています。訪れる信者さんは女性ばかり。静けさは、夕闇とともに深まっていきました。

アラティの後、昼食とは違った場所で夕食を摂りました。この食事は、とても美味しいのです。わたしが知っているかぎりでは、食事を配るのはボーイさんの仕事ですが、ここでは尼僧と見習いの若い方が給仕をしてくださいました。食事が始まると、年配のアメリカ人の尼僧がわたしのところにいらして、話をして下さいました。ホーリーマザーとラーマクリシュナの母親に関する小さな本を3冊書かれたマタジで、数十年前に日本のヴェーダータ協会に来たことがあると、懐かしそうに話されていました。たった10日間ほどの日本滞在なのに、とても鮮明なその話に思わず引き込まれ、マタジにまた日本に来ていただけたらいいのに、と思いました。わたしよりは10歳以上は年上であられるはずなのに、若々しいそのお顔と声に、どんな信仰生活を送られているのだろうと思わずにはいられませんでした。



翌朝は、4時30分からマンガラム・アラティです。朝晩の冷え込みで風邪気味になり、瞑想に集中してくると、自律神経のせいか咳き込んでしまいます。まだ1月初めのことで、大理石の床が冷えるため、寺院にあるアーサナ(瞑想用のマット)を何枚も持ってきてくれるボランティアの女性がいました。ここでは、いつも誰かがお母さんみたいだ! そう思いました。

朝食の後再び寺院に行くと、歌声がするのです。ずっと同じチューンを繰り返す、清らかなみみたいな声が、どこからするのだろう? とシュラインの方に進んで行くと、白いサリーの見習い尼僧が、部屋の隅で「バガヴァッド・ギーター」の詠唱をしていま

した。これも修行のひとつなのでしょう。尼僧というイメージは、ここにやってくるまで、わたしの中ではとてもストイックなものでした。20代に観た「尼僧物語」という西洋の映画は、修道院生活に耐えられずに還俗する若い女性のことを描いたもので、いまだにそれを覚えているくらい印象に残っていたのです。しかし、このマトでは、尼さんたちはいつも笑っていて明るく楽しそう…。その映画の印象は完全に覆されました。

寺院にいと、時間があつという間に過ぎていきます。マトの庭園の反対側は、ガンガーが流れていますが、それ以外珍しいものは何もありません。感覚を刺激し楽しませる対象は何もないのに、一人でいて飽きたとか退屈するとかはなく、ずっといつまでもいたくなるのです。お部屋係りの尼僧が、もっと泊まっていきなさいと言うのでそうしたかったのですが、一泊なら部屋を片付けずに出掛けていいと、バルルマトの部屋係のお坊さまに言われてきたので、その約束は破るわけにはいきません。しかし、その尼僧の熱意はわたしをととても惹きつけ、数日後の再訪を約束しました。

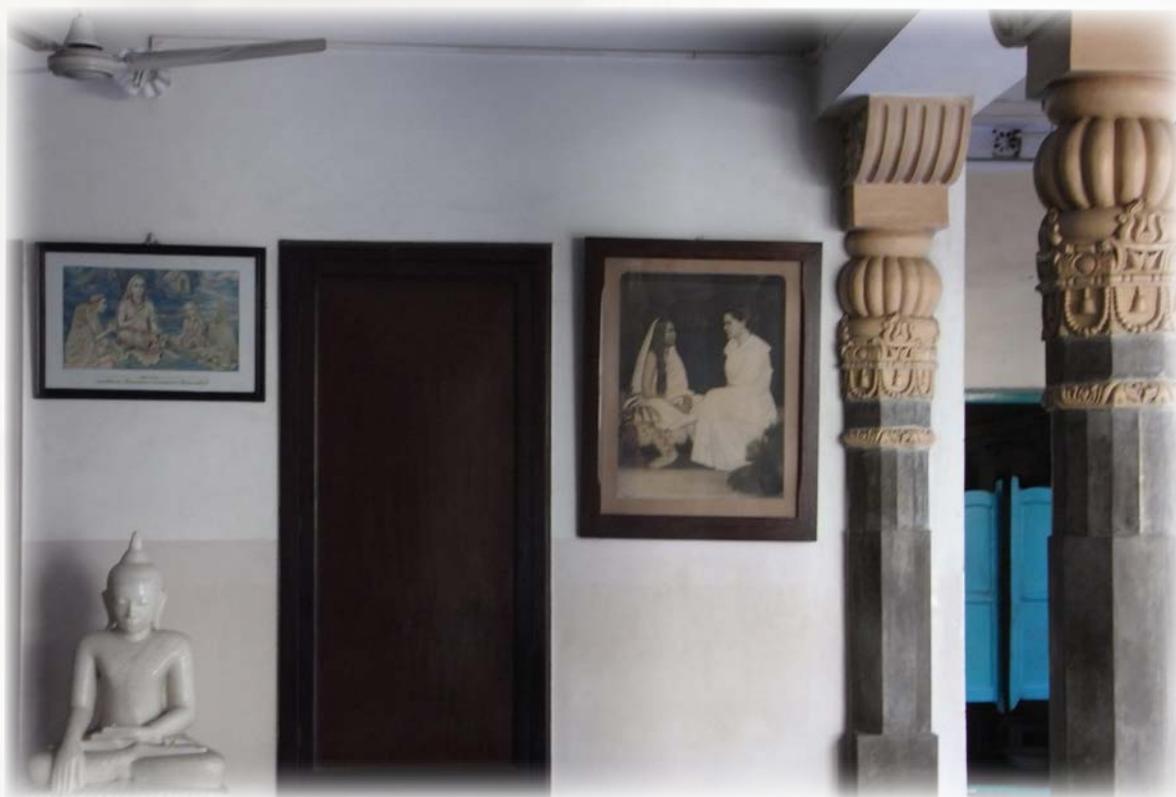
さて、その部屋係の尼僧が、この長の尼僧へのダルジャンの手配をして下さって、その方のお部屋に伺いました。その方は、ひざまずくわたしの肩を抱いて温かく祝福してくださいました。「わたしの肉体をこの世に送り出した母より、母そのものだ！」

お母さん、どうかこれからの、わたしの短くはない異国での日々を、温かく見守ってください…。

昼食までの時間、書籍売り場で本を見ているわたしに、ボランティアの女性が勧めてくれたのが、マザーの誕生について書かれた小さな本です。昨晚お目にかかった、アメリカ人の尼僧が書かれた本で、なぜか3冊あるうちの2冊だけを求めました。バルルマトに帰ってから、なぜもう1冊も買わなかったかと後悔したのですが、その1冊を、後日訪れたシホレのサーラダマトでいただくことになったのは不思議なことでした。

昼食後、マトの門が一度閉まります。3時にそこが再び開くまで部屋で休憩をとってから、バルルマトに戻ることにしました。前日の正午前に来たのがずっと昔のことで、このマトの中だけ外の世界とは違う時間が流れているかのように感じました。ゲストハウスの一階に滞在している年配の尼僧が、出掛けようとしているわたしに、風が強いからボートに乗らないほうがいい、ドッキネッションのバス停留所まで行ったら、タクシーを拾ってバルルマトまで行きなさい、と言われたのです。尼僧は、ボランティアをしにやって来た女性の一人に、サイクルキシャを拾ってくるように指示してくださいました。わたしは小さな子供になったように、マタジの好意を受け入れ甘えていました。

ボランティアの女性と門の外の通りへ出て、彼女が捕まえてくれたリキシャに乗り、ドッキネッションのバススタンドに着いた頃には、もう夕暮れが近づいていました。 ■



自由詩

－ 佐藤 洋子

目覚めよ立ち上がれのマーチ

目覚めよ立ち上がれ、目覚めよ立ち上がれ！
この世は深く ねむってる
ひらめく稲妻の 一瞬の中に
顕れるねむりの道と 目覚めの道

人は坂道 転がるように
ねむりの道に 落ちてゆく
目覚めの道は いばらの道
怒涛の嵐 渦巻く道

はじめ苦しいことの中に 信仰の秘密隠れてる
はじめ心地よいことの中に 地獄の世界ひそんでる

目ざめて歩むひとこの秘密の
気配感じて 立ち上がる
すぐねむりに 戻るひと
幾千万、生死 繰り返す

人よ目覚めよ 立ち上がれ
めざす終点まで 立ちどまるな

100万遍ころんでも 101万遍踏み出せ
決してあきらめるな 神のいとし子
ひとは無限の アートマンだから
おそれず最後まで 歩みつづけよ

右手に放棄のつるぎ持って 左手にマントラの旗かかげ
さあ立て目覚めの 一步を踏み出せ
目覚めの一步を さあ、踏み出せー

無常

1. 石打つ雨だれ 一瞬の命
二度と会えぬ その一滴と
 2. 川の流れ 無数の水滴
ひと時も 同じ流れなし
 3. 意識あるもの 無いもの
生まれて消える 何もかも
 4. 淵もわからぬ 闇の連なり
宇宙の中に 生きてる星
いにしえより 争っている 喘いでいる 星
青く輝く 小さき星
- すべてまばたきの 間だけ
すべてはまばたきの 間だけなのに

悟りと人生

ときは過ぎ ときは来たり
人生はきたり 人生は過ぎゆく
無窮の中の 人生 つかの間の

信仰は学識になく 哲学にもなし
信仰は論理になく 講義にもなし
悟りの近道 それは信仰

多くの知識得たとて 役に立たぬ悟りには
信仰は ただの 暮らしの中にあり
失敗落胆絶望の そのただ中にある

行のための難行苦行 その中に悟り無し
特殊と思うな 悟りの修業
ただひたすら生きる それが最大の修業

積みあげた宗教知識 無心に生きること
最高の苦行の 行はそれ

忍びよる夕暮れ 君永遠の平安得てるか
目を閉じよう歓喜とともに ねむる赤子のやすらぐごとく
ねむる赤子の やすらぎのように
ときは過ぎ ときは来たり
人生はきたり 人生は過ぎゆく
無窮の中の 人生 つかの間の

何とのろまな我が母は

母よ母よ、米を足して あなたの米倉この星に
徳という名の米が 不足してます
早く足して早く 地球は飢えに狂いそう

母よ母よ、水を注いで あなたの星の水源に

信仰という名の水が 不足してます
早く注いで早く 地球は割れそう乾燥で

母よ母よ、空気をつつんで あなたの作ったこの星を
純粋な愛という空気が 不足してます
早く開いて早く 愛のボンベ 窒息しそうなこの星へ

生と維持、破壊の主 三界統べる我が母
無上の愛を放射して 燦然と輝く我が母
瀕死の星 呻くあなたの愛し子
母よ母よと叫ぶ声も 枯れ果てた

ああ 何とのろまな のろまな母
死のその時にだけ 顔見せるのか我が母
死のその時にしか 現れぬのか母よ
我が母よ 母よ

宙のイベントで思うこと…

－ 山田 さくら

ここ長野県大町市は、まだまだ自然環境も残っていて家の外に出れば北アルプスがドーンと目の前に迫力のある姿を見せてくれます。くっきりと美しい姿を見ると、毎日見ている心洗われる気がします。



インドのシャンティニケタンに住んでいた頃、インドでホームシックにかかることなどまずなかった私が、日本人の友人から借りた星野富弘さんの絵詩集を見ているうちに日本への思いに心奪われて胸に熱いものがこみあげてきたことがありました。日本で生まれ育った者にとって、水彩画で描かれた日本の風景・植物などが忘れていた懐かしさを蘇らせてしまったのでしょう。日本人は、四季折々の豊かな自然環境に育てられてきた国民であり、自然の移り変わりを上手に感じる事が出来、そこから派生した様々な文化を持った国民性が特徴なのだということに改めて気づかされたのです。日本の豊かな自然環境で幼いころから育った人間だからこそ思いを馳せることが出来たのだと思うのです。

ラビンドラナート・タゴールが、おっしゃっています。

『子ども達は、自然の事物に囲まれていなければならないと私は信じています。自然の事物はそれ自体に教育的価値を持っているからです』

『神は、子ども達が大自然の中でのびのびと教育されることを意図された』

その通りだと思います。そしてここ信州大町は恵まれた自然に囲まれ、子ども達を育てるのに最適な場所だと信じています。

☆☆☆☆☆

今年も恒例のわっこひろば宙の開園イベントが、7月初旬に「千年の森」で行われました。年々参加者が増え、今年は親子合わせて60人以上が集まり自然体験を楽しみました。この開園イベントに集まった子ども達の年齢層は0歳～小学3,4年生位ですが、みんなパワフルでやんちゃで子ども達はいつの時代も変わることなく成長しようとしている姿が見てとれます。そして自然が大好き！！なのです。

まだ歩けない子ども達は、お父さんかお母さんに背負われみんなと一緒に山歩き。自然に囲まれた清々しい空気の中でまだおしゃべり出来ない子ども達もまた自然を体感しパワーをもらって生き生きとしています。

親達も日々の忙しさから解放され、「久しぶりに楽し〜い！！」と良い顔で子ども達と森の気を共有。

大きい子ども達は、大人顔負けでずんずん歩き時々手ごろな木に登ってご満悦。小川があると、裸足になってはしゃいでいます。

梅雨半ばのこの時期ですが朝、ざあざあ降りの雨だったとしてもみんなが集合する頃には小降りになり、

いざ山へ出発という時になると、雨は上がり木々の間から木洩れ日が射し始めるのも毎年の恒例となってきました。今年もまたそんな天候の中の山歩きで、少々足元は悪いもののみんな慣れたもので楽しんで歩いていました。森の神様に感謝です…

この森には、いろんな人達が作ったツリーハウスもたくさんあって、そこで遊ぶのも子ども達の楽しみの一つ。

ツリーハウスでの遊びは、冒険心をくすぐられる遊びのようです。それとこの日の子ども達のもう一つのお楽しみは、薪で作る野外料理。

毎年定番のキーマカレー・野菜と豆のカレーそしてナン。子ども達も食べるので全く辛いインド人もびっくりのカレーですが、大人にもなかなかの好評で今年も完食でした！！薪で作る料理って、自然に囲まれて食べるのにピッタリ！窯で焼いたナンも大人気でアツと言う間になくなりました。

このイベントに参加している子ども達は、みんな自然と一体化して休む間もなく動き回り心底楽しんでいました。毎年思うのですが、子ども達は自然に恵まれた環境さえあれば昔も今も変わることなく遊べるということなのでしょう。日常の中でもまた私達大人が、子ども達が伸び伸びと遊べる場所を作っていければと思います。

今年も宙のビッグイベントが無事に終わり、ホッとしています。

今のこの国の不穏な空気が心配ですが、全てがあの方の意志だとするならば、悪いようにはなさらないと信じるだけです。

来年もまたこの千年の森で、自然とともに楽しい時間を過ごせますように！



☆☆☆☆☆

最後にもう一つタゴールの言葉を引用したいと思います。

『育ち盛りの間は、自由ということが精神にとって不可欠である。そして自由は、大自然の懐の中に豊かに備えられている』
美しい自然、厳しい自然…どのような自然であれ、それぞれの人間を育てていることは間違いありません。息子達がタゴール創設の学校で、国境を越えて伸び伸びと楽しんで学べたのも木の下での授業と時々訪れる動物や虫達という自然に囲まれていたことが大きな理由だったのかもしれませんが。そしてそこで自由という精神も培われていったと信じています。

次世代の子ども達が今のような時代を超えて、日常の自然とともに伸び伸びと成長し自由な精神が培われていくことを願って止みません。 ■

楽しいインドでのショッピング～昔と今～

－ 川満 恵里菜

私が小さい頃、父の故郷・インドに里帰りする度に私の母が毎回楽しみにしていたことがあった。それはベッドカバーショッピング。私の記憶の中で覚えているのはニューマーケットにあるボンベイ・ダイニングでのショッピングだが、おそらくシャンパールとかでも品定めしていたに違いない。その時の私が決まっていた事は「ねえーまだー?」「はやくー」これは毎回だ。おそらく「つまらない」とかも言っただろう。話を聞くと父や他の親戚達にも急かされた事があるらしい。大人も待ちきれない程時間を取っていたなら、子供はなおさら無理だろう。ところがどっこい!ベッドカバーなんて全く興味が無かった私が今やインドのベッドカバーショッピングにどっぷりハマっているのだ!

事の発端は自分が結婚した時の事。一人暮らしをした事がなかった私は初めて自分の城を持ち、家中のインテリアを自分の好きなように出来る機会を初めて得たのである。もちろん、ベッドカバーもインテリアの一部だ。今までは自分の母がインドから仕入れたベッドカバーを何気なしに使っていたので、ベッドカバーを買うという機会が無かった私はとりあえず安い物と高い物両方見てみようと思いつき無印良品と伊勢丹に行ってみた。そしてショックを受けた。無印のベッドカバーはダサイくせにまあまあなお値段がついているし、(ダサイと言ってもただ無地なだけ)伊勢丹に行ったらとてもおしゃれで気に入ったものを見つけたのだが、値段が4万～5万円だったのだ。(枕カバーも含まれていたかは定かではない)その瞬間、日本でベッドカバーを買うのを諦めた。そして、次にインドに行った時に買おうと決心した。そして約8カ月後、次はインド(バンガロール)に飛び立ちました。自分の大学の関連の用事の為にいったので、その用事を済ませてすぐにボンベイ・ダイニングへ直行。私はその時学生のような恰好をしていたので、おそらくお店の人は何の期待もせず接客していたはず。自分自身、とりあえず見てみようという軽い気持ちで入ったのだから・・・なので、どんなデザインが良いの?と聞かれても曖昧にしか答えられない私。綺麗に折りたたまれて積み上げられているベッドカバーの一部(ベッドカバー全体の1%未満の面積だと思う)を見て想像を膨らましてから店員さんに「これ見せて」と言い、棚から出してもらう。そして、これは好きだの嫌いだのコメントをして、次を探す。そんなことをしているうちに店員さんも私の好みを汲み取って自分から勧めてくれる。その結果、気に入るものが見つかるのだが、だんだん疲れてくる。そりゃそうだ!初めてのベッドカバーショッピングだし、そもそもベッドカバーを選ぶのは時間がかかるのだ。この時初めて「はやくー」と自分の母を急かしていた小さかった時の事を思い出す。しかし、そんなこんなでお気に入りを見つけた。しかもそのお店で売られている高めのシリーズまで買ってしまった。(私がこれも見せてよ!と高いコーナーの所に行ったら「マダム!そちらは高いですよ!」と言われた時には良いから見せてよ!と内心笑ってしまった)この日、何セット買ったかは覚えていないが、結構重かったのだ。3セット位買ったのだと思う。これがインドに到着して2日目か3日目の事。まさかこの時の1か月の滞在で合計8セットのベッドカバーセットを日本に持って帰る事になるとは想像していなかった・・・この時は飛行機に預ける荷物の重さが10キロ近くオーバーしていたのでヒヤヒヤしたが、シンガポール航空が優しかったのか、その職員が優しかったのか、超過料金を取られず持って帰ってくる事が出来た。

さて、これが私の初めてのベッドカバーショッピング体験だった訳だが、今はもうお店では買いません。とにかく疲れるのと、お店にあるベッドカバーの全てを広げて見る事が出来る訳ではないので効率が悪いのだ。自分が気に入らないダサイ物しか見つからないリスクもあるし・・・じゃあどこで買うかって?そこは現代!インターネットショッピングを活用している。日本ではずいぶん前から信頼のおけるネットショップや配達システムが出来上がっていたものの、インドで信頼できるネットショップが流行りだし

たのはここ4～5年前ではないだろうか?(ネットショップが無かった訳ではない。信頼できるショップ&配達システムの発達の話である)とにかく従兄にインドのネットショップのサイトを教えてもらって以来ベッドカバーショッピングはネットショップのみ。全ての商品がベッドにかけてある状態で見られるから、イメージしやすいのだ。気を付けたいのが写真で見たときと実物が届いて至近距離で見たときの差だ。写真で全体を見るとカッコよくても、近くで見るとイメージと違う・・・なんてことはあるのだ。それを防ぐ為にズームインして見るのは当たり前。それからあまりにも値段が安い物を買うとちゃっちゃい物が届く可能性大。まともなデザインとクオリティーは(割引後で)1000ルピーから。(約2000円)それ以下の値段の物は仮に写真上でデザインが気に入ってもいざ手に取った時に気に入らない可能性が高いので買わない事になっている。ただ、日本の部屋にも合う上品なデザインを求めると大抵割引後の値段で1500ルピー以上する(約3000円)。3000ルピー以上だと生地の高さやクオリティーの高さに感激するほどだ。4000ルピー以上だとおそらく伊勢丹で並んでいてもおかしくないレベルのクオリティーだ。安かれ悪かれとは思わないが、やはり値段と布のクオリティー・デザインは比例するのは間違いない。

こんな感じで自分や親がインドに行くことになると、インドに出発する数日前にオンラインで注文して、インドの自宅に届けてもらう事が恒例になってしまった。そんなこんなで今自宅にはダブルベッドカバーと枕カバーのセットが14セットとシングルベッドカバーと枕カバーのセットは2セットある。どうしてこんなに増えてしまったかという点、季節に合わせてデザインを選んで買っていたらこうなったのだ。四季はもちろん、梅雨や新緑のイメージの物まである。とにかく全て気に入っている。但し、ボンベイ・ダイニングでしか買わない。乾きが早い、縮まない、色落ちしない。素晴らしいメーカーだと思っている。おそらくもう日本でベッドカバーを買う事なんて一生無いと思う。

ショッピングというタイトルを付けておきながらベッドカバーの話しかしないのはとにかく私の中で、インドで買う物で一番役に立つ・気に入っているものがベッドカバー位しかないからだ。インドの服も買うのだが、結局日本に帰ってくると一回も着ない。インドアクセサリーもサリーやクルタにはぴったりなのだが、私が日本で普段着るような服には合わない。(日本はプラチナやシルバーが流行っているが、これも私の浅黒い肌には合わないのだ。結局香港で金のアクセサリーを買う)紅茶もそんなに飲まないし、今日本で流行っているヘナにも興味がない。昔はインドグッズを買っていたが、いざ日本に持って帰ってくると自分の日本での生活スタイルに合わない事に気づく。結果使わない。強いと言うならインドのスパイスやお菓子を持って帰ってきて食べるが、ショッピングとはちょっと違うだろう・・・唯一インドで買って日本でも使えるのが結婚式に持って行くクラッチバッグ。日本の物価と比べると安いのに、ゴージャスな感じで、日本で売られている物と似たようなものが出回っているから、そういうものを買えば役に立つ。ただ、もう数はそろったから買う事はないだろう・・・

という事で、やっぱり私の中ではインド＝ベッドカバーなのだ。友達でインドに行く人がいたら必ず勧める位。ガイドブックに載っていないのが不思議な位だ。それとも、日本人は、ベッドカバーは無地の物を好むから興味が無いのだろうか?しかし、私の母がインドで良く買っていた頃、日本人ママで買い取りたい!という人もいた位だから、興味が無いってことはないだろう・・・どっちにしろ、私はこれからもインドに行く人にはボンベイ・ダイニングに行くことを勧めるし、自分もインドでおそらく買い続けるだろう。今は引出2段分がベッドカバーでいっぱい自粛しているが・・・(泣)

インドから日本へ

～徒然なるままによしなしごとを～

－ 佐伯 田鶴(さえきたづ)

～はじめに～

インドという国のことを知ったのは、子供の頃(保育園の頃?)であろうか、寝る前に母親が読み聞かせてくれた「ヤン坊ニン坊トン坊」という本であった。1950年代にNHKラジオで放映された子供向けのラジオドラマをもとにした本らしい(ということは本稿を書くにあたり調べて初めて知った)。当時すでにかなり古かった本であったが、母がその話を好きだったらしく、取っておいたものを読んでくれたらしかった。さておき、その内容はといえば、ヤン坊・ニン坊・トン坊という白猿の兄弟が、故郷のインドにいる両親に会うために、中国からインドへ帰る長い旅の物語だ。詳しい話は忘れてしまったが、異国情緒にあふれ、森を抜け川を渡り高い山を超え、トラやゾウやオオカミ、そしてなぜかカラスなども登場し、わくわくしたことを覚えている。そして、日本のとなりの中国はなんとなく想像がつくが、さらに西にはインドという遠い国もあるのだな、と思っていた。

その後、大人になったものの、インドには行ったこともなく、縁もあまりない私がこの記事を書いてよいものやら…と迷うところではあるが、ひょんなことから依頼を受けたので、とりあえず筆を進めてみる。



～インドから日本:カレー～

縁が深くないとはいえず、仕事の関係でこれまで5人のインド出身の方々と一緒に働く機会があった。そのうち2人がベンガル出身である。そんなベンガル出身の一人とインドの「カレー」について話をしていた時、東京の新宿にあるレストランで供されるインドカレーがベンガル出身のインド人によって創始されたという話になった。話をよく聞いてみると、それは、私が子供のころから母親につれられていった、新宿の「中村屋」というレストランだったのである。(カレー以外の料理もあるので、子供でも食べられるものがある。辛いものが食べられるような歳になると、もちろんインドカレーを注文したが。)意外なところでつながるものだ。

そのインド式のカレーを初めて日本に紹介したベンガル人が、皆様はよくご存知の(私はこの話を聞いて初めて知った)、インド独立運動に身を投じ、日本に亡命したラス・ビハリ・ボース(Rash Behari Bose)である(詳しくは中村屋のホームページを参照下さい)。あの中村屋のインドカレーにそんな由来があるとは思ってもみなかった。今でこそ日本でも多くみられるインドカレーであるが、当時の日本人には新鮮な味だったにちがいない。



～インドから日本:風～

少し空を見よう。

図1は、インド・コルカタと日本・東京の気温と降水量(平年値＝過去30年間の平均値)のグラフである。コルカタでは3月頃から暑い日が続き、6月から9月は雨量が多い雨季となり、12月から1月は気温も相対的に低下する。雨季以外の月降水量は東京よりも少ない。私は現地へ赴いたことはないが、皆さんの体感もこのような感じでしょうか?10月のDurga Pujaのお祭りの頃は、インドの雨季は終了、でもまだまだ気温は高いですね。

さて、この降水量の変化は、主として風系の大規模な変化、つまりモンスーン(季節風)によってもたらされる。モンスーンは、地球が受ける太陽放射、および大陸と海洋の熱的な性質の違いによって生じる風である。さらにアジアでは、標高の高いチベット高原の影響も受けるため、他では見られない大規模なモンスーンが形成される。このアジアモンスーンは、数ある世界の季節

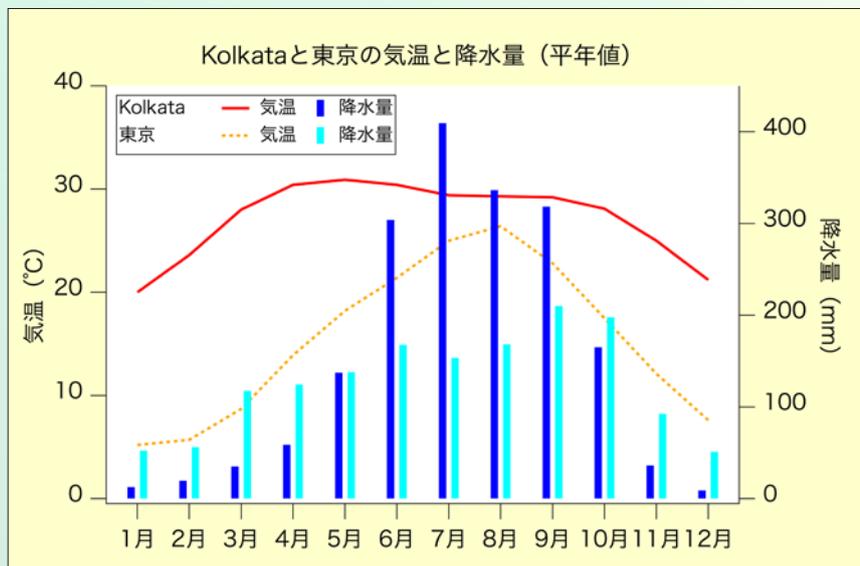


図1 コルカタ(Kolkata)と東京の気温と降水量



風のなかでもっとも顕著なものだそうである。インドも日本も、このアジアモンスーンの影響を受ける地域にある。数ヶ月程度で変動するモンスーンに支配されるこの地域では明瞭な季節変化が見られ、気温や降水に左右される農業や林業はもちろん、ひいては農業や気候に伴う伝統的な祭りや行事にもモンスーンの影響を受けているものが多いであろう。「四季」は基本的に地球の地軸の傾きによって生じるものだが、モンスーンによって、「梅雨」や「夏の暑さ」「冬の寒さ」といった彩りが添えられる。

そのモンスーンの風を示したのが図2である。1月は、インド、日本ともに、北風が吹く。シベリア高気圧から吹き出す北風が日本付近で特に強く、その流れは南下して東南アジア、インド近辺まで達する。一方、6月ころからは南からの風となり、特にベンガル付近では、ベンガル湾からの湿った南風の吹き込みにより、雨量が多くなり、雨季となる。アフリカ東岸からインド洋にかけての風はさらに東南アジア東アジアへと続く。インドからの南西モンスーンはチベット高原を超えられず、高原南側を迂回し、東アジアで北からの乾いた風と合流し、前線を形成する。これが梅雨前線であり、日本でも6月に雨季を迎える。西から東へいろいろなもの伝わってくるものである。

～終わりに～

冒頭にインドには行ったことも無く、と書いた私ではあるが、仕事の関係でこの11月にブネに行くことになっている。今年は初めてインドに行き、このAnjaliの原稿を書くことになった。なにやらインドにご縁がある1年である。今後もこのご縁を大事にしていきたいものである。久しぶりに中村屋のカレーでも食べにいかうかな…



写真:1ページ目から、京都御所の桜、夏祭りの提灯、真如堂の秋、雪の鹿苑寺(金閣寺)

参考文献:小倉義光「一般気象学(第2版)」東京大学出版、1999年。岩坂泰信「大気環境学」岩波書店、2003年。

謝辞:図1と図2は、それぞれ、気象庁による世界の天候データツール(ClimatView; <http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/climatview/frame.php>)、アメリカNOAA/OAR/ESRL PSD によるNCEP Reanalysis Derived data(<http://www.esrl.noaa.gov/psd/>)によるデータを使用した。

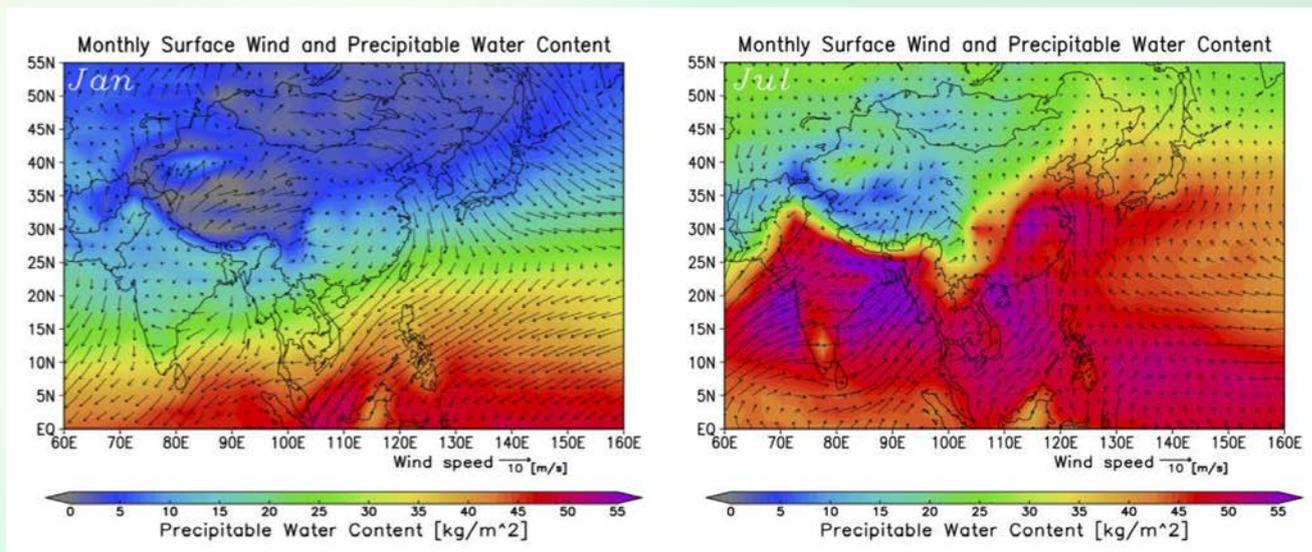


図2 アジア域における1月(左)と7月(右)の風向・風速と可降水量(平年値)。矢印の方向が風向を、矢印の長さが風速を表す。色は、可降水量を示しており、色が赤いほど大気中の水蒸気が多い。

モエレ沼公園

－ 辻しのぶ

北海道が大好きだ。

毎年の休暇を北海道で過ごすようになって、10年くらい経つだろうか。せわしなく観光にいそしんだのは、昔の話。今は慣れたホテルに滞在し、街で買い物をしたり、散歩したりと普通の生活を楽しんでいる。街に溶けこみすぎているのか、時々観光客に道を尋ねられることもある。そんなときもし札幌のお勧めの観光スポットを尋ねられたら、私は間違いなくこう答えるだろう。すすきのでも時計台でもない、「モエレ沼公園」と。

札幌駅から地下鉄とバスを乗り継いで1時間ほどの郊外に、モエレ沼公園はある。世界的な彫刻家イサム・ノグチ氏の設計によるこの公園は、もとはゴミ処理場だった。以前より地球そのものを使って彫刻作品を作りたいと考えていたノグチ氏は、市街地を公園や緑地帯で包み込もうという札幌市の「環状グリーンベルト構想」の一部として計画されたここを訪れた際、この地に強い興味を示したのだという。そして彼は、敷地面積が190ヘクタール近い広さを持つこの地で「全体を一つの彫刻とみなした公園」の設計に情熱を傾けることになる。

バス停「モエレ沼公園」から5分ほど歩くと、陽の光を浴びてキラキラと光る透明な建物、「HIDAMARI」通称ガラスのピラミッドが見える。名前からパリのルーブル美術館にある建物を想像するが、まさにそのとおり。ただし本家が三角錐なのに対し、HIDAMARIは三角錐、四角錐と立方体が合わさった複雑な形をしている。一歩中に入ると、ギャラリーやレストラン、ショップなどが配置されている。陽ざしが降り注ぐホールには大きなテーブルがいくつか置かれており、地元の方だろうか、年配のグループが楽しそうにお弁当を広げている。北国の長く厳しい冬がようやく明けて訪れた、夏の陽ざしを存分に楽しんでいるように見える。

HIDAMARIを抜けるといよいよ広大な敷地の公園が始まる。シロツメクサと芝生が隙間なく生える地面を踏みしめ、「サクラの森」に向かう。約2,600本の桜の木が植えられたこのエリアには、隠されるように7つの遊具エリアが設置されている。ノグチ氏デザインのその遊具は彫刻とも呼べるものだが、もちろん触れて遊ぶことができる。そのデザインはモダンで美しく、オブジェと言われても信じてしまうだろう。子供たちはひとしきり遊具で遊ぶと、とたんに違う遊具を見つけてそこに走って行きまた遊び始める、ノグチ氏はそんな光景を思い描きながらここを設計したのだという。

サクラの森を抜けて人工の「モエレビーチ」を通り過ぎると、美しい稜線をもつ「プレイマウンテン」に到着する。高さ30メートル、幅



340メートルのこの山は、見る角度によって違ったフォルムを楽しむことができる。半分は美しい芝生に覆われ、山頂に向かって歩道が伸びている。誘われるようにゆるやかなその道を進み山頂に到着すると、まだ誰にも触れていない心地よい風と、札幌市北東部ののどかな風景を楽しむことができる。そして山頂を後にしようとする、今度は足元に整然と石段がならぶ。瀬戸内海の犬島から運ばれたという花崗岩は99段。ふいに現れた石段を注意深く踏みしめながらこの小さな登山が終わった時振り返ると、そこには遺跡を思わせる美しい「遊び山(プレイマウンテン)」がたたずんでいるのだ。

軽い登山を終えて息を整えながら、目の前にあらわれたカラマツの林に向かう。それまで真上から容赦なく注いでいた初夏の日差しは、天に向かって迷いなく伸びたカラマツの木々によってさざぎられ、さっきまでの明るさに慣れていた目には、一瞬暗闇に映るかもしれない。足元に落ちた葉や枝を踏みしめながら一歩ずつ歩き進めると、存分に陽を浴びながら成長を続けている木々の放つ青い匂いを感じる。



と、ふいに林から抜け出し、目の前が抜けたように広がる。そこは「海の噴水」だ。だがそこにたどり着いた時、それが噴水だとは信じられないかもしれない。なぜならその、まるでクレーターのよう直径48メートルのすり鉢状のコンクリートには、水は一滴もない。実は「海の噴水」は常時放水されているわけではなく、1日3,4回のプログラムの間だけ運転し

ている。だから初めて訪れた人は本当にこれが噴水なのか、といぶかしむに違いない。

中でもおすすめは、40分にわたるロングプログラムだ。まず、噴水の小さな内円にそった部分からミスト状の水が放出される。それがだんだん力強くなったところ、中心部分から真上に向かって約25メートルの放水が始まる。広々とした空にのびやかに放たれる水の柱は圧巻だ。水柱の高さがだんだん低くなってきた頃、今度は内縁から大量の水があふれ出し、それが噴水内部でまるで生きているかのように荒々しくうねりだす。まるで洗濯機の中のような。気がつくと、最初からっぽだったすり鉢状の噴水はいつのまにかみなみと水をたたえ、最初はゆるやかに、その後荒ぶるように水は跳ね続ける。噴水を取り巻くカラマツの林の静寂さと水の躍動感の対比がおもしろい。噴水の周りに集まっている観客も、固唾をのんで噴水の次の動きを見守っている。

まるで怒りをあらわにしているかのような噴水の動きがゆっくりと止まり、水面はその余韻だけを残してやわらかく揺れながら、静かに水が引いていく。さっきまでの荒々しさがウソのようだ。たぷりと張っていた水がほとんどなくなり、そろそろプログラムも終わるかと思った時、再びミスト状の放水が始まり、最後には内円の複数の箇所から中心に向かって美しい弧を描きながら水が放たれ、プログラムは幕を閉じた。

すべてにおいてダイナミックさを感じさせ、まるで生き物のような「海の噴水」は、噴水というよりは「水の彫刻」というのにふさわしい。長いこと噴水を研究しつづけ、マイアミや大阪万博にも噴水作品を手掛けたノグチ氏の、これが生涯最後に監修した噴水である。

園内には他にも、公共残土と不燃ごみを積み上げ造成した高さ52メートルの人工の山で、冬はウィンタースポーツも楽しめる「モエレ山」や、コンサートやパフォーマンスの舞台になる、半円を描いたような形の「ミュージックシェル」など、見どころ、遊びどころが満載だ。園内で乗れるレンタサイクルやウィンタースポーツをするときに使う道具の貸し出し料以外はすべて、無料で楽しめる。



ノグチ氏はモエレ沼公園のマスタープランを完成させた直後、ニューヨークで心不全により、公園が完成した姿を見ぬまま天命を全うした。彼の願いどおりに今、子供たちが彼の遊具で遊び、大人たちが自然の中でくつろいでいる姿を、彼は天国から眺めているのだろうか。いや、もしかしたら彼はこの公園のどこかにいて自身でも公園を楽しんでいるのかもしれない。

ちなみにノグチ氏の彫刻は、札幌市内の大通公園にもひとつ、設置されている。



「ブラックスライドマントラ」と名付けられた美しい曲線を描くそれは雪の降る札幌に映えるようにと黒で造られた滑り台で、滑り降りる子供たちのお尻で今も毎日磨かれている。

観光地として魅力たっぷりの北海道、札幌。すすきのも時計台もいいけれど、次はぜひ、アートも自然もたっぷり味わえる、モエレ沼公園に足を運んでみてはいかがだろうか。 ■

